

ダイバーシティ推進委員会アンケート結果

平成 30 年 1 月 31 日
ダイバーシティ推進委員会

1. 回答状況

回答期間：2017/12/5 から 2018/1/9 まで

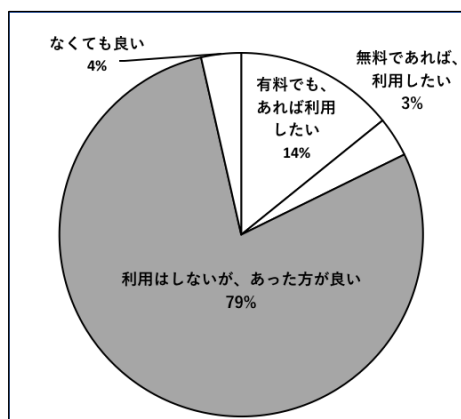
回答者数：139 名（全会員数 1191 名：回答率 11.6%）

- 内訳：男性 99 名（男性会員数 941 名：回答率 10.5%）・女性 40 名（女性会員数 250 名：回答率 16.0%）
- 内訳：若手会員・学生会員 12 名（該当会員数 282 名：回答率 4.3%）・正会員（含名誉会員）127 名（該当会員数 860 名：回答率 14.8%）

*重複回答者は 10 名おり、最初の回答を採用した

2. 大会会期中に、会場内に託児室があった方が良いですか。一つお選びください。

- 有料でも、あれば利用したい（14%）
- 無料であれば、利用したい（3%）
- 利用はしないが、あった方がいい（79%）
- なくても良い（3%）



コメント

有料でも、あれば利用したい

- 自身の子どもは、託児室を利用する未就学の年齢ではありませんが、基本的に託児室は必ず選択肢の一つとしてあるべきだと思います（以前託児室を利用しました）。当然費用がかかるのは仕方ありませんので、無理に学会が負担する必要はないと思います。託児所が必要か不必要かなど、時代遅れな議論をせずに（あって当然）、次の次元の議論をして頂きたい。
- 女性参加を促すためには、是非必要。託児所を設ける学会も増加した。
- 託児所がない、あるいは高額なために大会に参加できない例が身の回りがあるので託児所は用意すべきと思います。また、大会の会場近隣から通い、家庭の事情で遅い時間までは参加できない会員のために、主なプログラムは 17 時迄に終了させることも重要と思います。
- 子供の年齢別に部屋を分けてほしい。幼児施設と同じように。宿泊を含め子供のフォローがあるとよいと思います。
- 現在独身だが、将来子供を授かった時に託児施設の有無が学会参加の可否を左右すること

になると思う。育児中であっても最新の情報を得たい思いはそれまでと変わらないか、より切実になると思われるため、託児施設の設置を切に希望する。

○無料であれば、利用したい

- 一人一日一万になるときついですが、ある程度の出費は必要であれば出してもいいと思います。

○利用はしないが、あった方がいい

- 妻の所属する臨床系の学会は、恐らく無料で預けることができたはずで。女性の学会参加のために必要であると考えます。あるいは、男性も子どもとの小旅行というイベントにすることで、子どもとの繋がりを強めて、パートナーの負担を減らすなど、様々な利用方法が考えられます。事前申し込みにすれば、対応はしやすくなると考えられます。
- 適切な金額で利用できるの良いのではないのでしょうか。
- 予めの予約制にし、無料で行うことが望ましいと考えます。
- 託児業務の実績のあるサービス業者と大会事務局が契約し、学会補助+自己負担（1000-2000円?）を合わせて運営するという形態がよいのではないのでしょうか。
- 数年前だったら、有料でも利用していた。今は子供が成長して、必要性はなくなりましたが。
- 大会参加申込みと同時に託児所利用申込みも行うのが良いと思います。
- 継続的に託児室が設置され、演題登録時からそのことが周知されていると、参加を積極的に考える会員が増えると考えます。
- 託児室が必要な児童はおりませんが、あった方が良いと思います。
- 時代の流れでないよりあった方が良い。目的の趣旨と一致する。
- 子供がないので利用はしないですが大会会期中は全てのセッションをカバーできるようにあった方が助かる人もいるのかもしれない。
- 遠方からの参加者は、託児室があったとしても、開催地までの移動や宿泊で難があって参加しにくいのかもかもしれませんが。学会の取り組みとしてはあっても良いと思います。
- 学会開催側の基本姿勢として、子供をお持ちの学会員が「学会への参加」そのものに悩まなくて済むように、少なくとも学会開催の案内時には要望を受け付ける体制が必要だと感じます。
- 託児室でなくとも、大人しいお子さんなら学会に連れてくるのも構いません。
- 利用者負担にすべきなので、無料は良くない考える。
- 私は必要ないですが、一緒の世代や後輩の子供が小さい間は、学会にこなくなるので、あれば空白期間が少なくなると思います。
- 正会員や若手・学生会員の別を問わず、全ての女性会員の意見を集約して尊重すれば良いと考えます。
- ポスター会場には子供連れで行けても、講演には行きにくいだろうから。
- 会場内に設置すると、場所代あるいは保育さんの人件費がかかり煩雑なので、あればですが、近隣の託児所に委託するのは如何でしょうか？

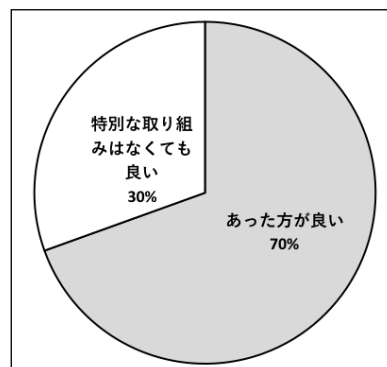
- 男女を問わず託児施設があるほうが参加しやすい方も増えると考えます。とは言え、出張費との兼ね合いで家族同伴の学会出張がどこまで許容されるかは、各研究機関・国、等の財源で縛られるため、託児施設がどれほどの効果を発揮するかは、そちら側の柔軟性・要因によるもの大きいかと思えます。
- うちにも子供がおり、託児室の利用も考えたことはあるが、現実的に子連れで参加しようと思ったことはないし、現状では参加できない。学会期間中は妻が自宅で子供たちの面倒を見てくれている。小さな子供を連れて遠方から学会に参加しようとする場合、開催地に到着するまでの公共機関の利用自体も大変であり、交通費等の費用負担も結構かかるし、精神的にも疲れる。無料とまでは言わないが、利用料を安くしないと、多大な自己負担（肉体的にも精神的にも経済的にも）をかけてまで参加しようとは思わない。現実的に、小さな子供がいて学会に参加することは想像以上に困難であり、参加できても本当に学会の一部しか参加できない。小学生くらいでも自宅に数日一人でおいておくことはできない（9月でも地域によっては小学校は始まっていて、学校を休ませて連れて行かないといけない）。託児室があっても子供が親から離れない場合や子供のことが気になって集中できないことも多い。また、懇親会や夜の会食にも参加できないし、参加しても子供が常にそばにいればゆっくりと話せないため、人的交流も難しく、何のために学会に来たのかわからないケースも多い。どこかの市議が議会で赤ちゃんを連れて参加したという騒動があったが、同様の問題だと思う。いずれにせよ、子連れでの参加を促進するのであれば、託児室の充実や子供を飽きさせないようなイベントを企画するなど（学会参加者の中で子供好きな大学生や大学院生、教員などに手伝ってもらうなど）、託児内容の充実は必要であり、少しでも子連れで参加する参加者の負担を軽減できるシステム作りが重要と考える。
- 託児室には、英語が話せる人がいた方が良くと思います。
- これまでも多くの大会で託児室が合った。今後さらに充実するよう希望する。
- 女性の参加を促す意味では必須かと思えます

○なくても良い

- 乳児がいる場合の参加は現実大変。また、準備に必要な費用も加算。共同研究者で研究成果を共有化する。
- 事件や事故の発生に対する危機管理体制が整っていることが大前提です。
- 大会が1日なら意味はある。複数日なら託児所だけでは不十分。別途、補助金等を用意するのが良い。しかしその一方で「敢えて、子連れの学会を積極的に推奨する」というスタンスを取るのもよいかもしれない。次世代への科学の普及、という意味では重要になるかと。

3. 学会として、留学生(日本語を話せない外国人)の参加(大会への参加、会員登録)を促進する取り組みが必要だと思いますか。一つお選びください。

- あった方が良い (70%)
- 特別な取り組みはなくても良い (30%)



コメント

- あった方が良い

言語のサポート

- 英語での発表に力を入れた方が良くと思います。ISNなどのつながりを重視して、国際色豊かな学会にしてほしいと思います。
- 留学生のみならず、海外から来日しているポスドクも自由に参加できるようにしたい。
- 逆の発想でトンチンカンな意見かもしれません。優秀な留学生が日本での研究者としての定着を目指すことを目的とするなどとして、日本語の学会に参加して、発表する機会を設けやすくするなど、参加の敷居を低くする取り組みならむしろ意味があると思いました。
- 研究室の外国人留学生も参加できるような取り組みがあれば良いと思います。
- 少人数の留学生のためだけの配慮は必要ないと思いますが、グローバルスタンダードの観点から、ポスター発表のポスターや口頭発表のスライドの英語表記と、会場案内の看板も含めて、全てにおいて英語表記(少なくとも併記)が必要と考えます。
- 日本語による若手育成と両立可能な留学生への取り組みを推進する必要があるように思います。
- 国籍を問わず優秀な若手研究者の育成とネットワークの構築を促進すべき
- ダイバーシティ推進は重要事項ですが、例えば外国人がいないのに、英語で発表・質疑応答するなど陳腐なことはしないでほしいです。どんなに英語に堪能であろうと母国語の日本語でディスカッションするよりも深い議論はできません。
- 留学生だけでなく海外からの参加者もいるので各時間帯必ず英語のセッションを入れる、若手道場も英語の部屋を設けるなど。
- 合同大会や連携開催の年に合わせてなど、毎年ではなくタイミングを見ながらの取り組みでも良いように思います。
- 演題、要旨、プログラム、会場案内に英語表記がなされていること。より多くの留学生が会員になり学会員数が増加することは良いことだと思います。例えば留学生向けのワークショップ・若手育成道場枠の実施を考えてみるなど。
- 会場に non-native がいる場合は適宜英語にするなど。
- 基本的に英語の発表にするのが良いと思います。
- 多様性が必要。いろんな人々が交流するのは重要
- 少なくとももどこかの会場では英語で聞けるようなプログラム編成が望ましいように思います。
- 大会におけるキャリアディベロップメントセミナーのようなセッションの開催

- もっと、英語でディスカッションする機会を増やしたほうが良いと思います。
- 留学生に積極的に参加していただくのであれば英語発表がマストになりますね。
- 英語化の議論は尽きないと思いますが、本学会は（例えば神経科学学会などと比べて）どちらかというと日本語主体であって欲しいと、個人的には思います。しかしながら、時代の趨勢から、留学生や外国からの招聘者等に対する配慮も必要だと思いますので、日本語/英語混在で行くしかないのではないのでしょうか。
- 全て英語のセッションがありますが、これは良いと思います
- 一般演題も英語のスライド、ポスターとし、英語発表のセッションも設ける
- 当日の会場ガイドなどには、先輩留学生をアルバイトとして雇用すれば、当人にも参加者にも利する。HPなどは、現実の留学生の多くは中国・韓国なので、中国語版韓国語版があればよりよいだろうが、彼らは英語を使えるので（というより、国際研究共通語として英語があるのだから）、英語版があれば、実質充分である。あまり理想に走らず、現実的な対応を。たとえば、口演は英語でも、日本人演者への質問は日本語でもOKとするなど（原稿は準備できるが、質問はアドリブなので、十分対応できない演者もいるし、浅薄な質疑になりがち）。現在は座長判断だが、公式にOKにしたらよい。
- ボランティア？通訳などヘルパーを備えた方がよいかも
- 学会の日程表の中でどの時間帯にも英語プログラムが必ずあるようにする。留学生と大会長、理事長らとの交流の機会を作るなど。「理事長と話してみよう英語版」
- 国際化を図る意味から実施した方が良いと思います。
- 会費・参加費などの軽減
- 発表のポスターやスライドを英語を用いて作成するくらいの協力はあっても良いと思うが、あくまでも日本国内の学会である以上、留学生が参加するためという理由で発表を英語にする必要はないと思う。日本に留学に来ている以上、日本語の習得を目指している場合もあるし、英語での発表を重視するのであれば、APSN や ISN への参加も可能である。学部生や大学院生の日本語でのディスカッション能力の育成も大事である。
- 留学生だけのセッションをつくる。
- 英語を学会の第2言語とし、少なくとも発表演題や抄録は英語・日本語両方で記述するべき。

交流活動

- 留学生も、今後は多く学会参加を促し、何らかの形で、アジアにおける学会開催を幅の広い視野で行っていく必要があると思う。学会組織化の点においても。
- ミキサーの実施。
- サイエンスだけでなく文化交流プログラムも有った方が良いかと思います。
- 学会の国際化の観点で、留学生の参加、発表を積極的に推進したい。

渡航費支援

- 優秀演題に対する渡航費の助成
- 予算の許す範囲で、travel award など検討してよいと思う。国際化が目的なら、発展途上国からの参加を促す取り組みがあつてよいと思う
- PhD やポスドクのインタビューの場として、トラベルアワードを設置して来訪頂くのは良

いと思う。

○特別な取り組みはなくても良い

- 各研究機関の判断に委ねる。
- 学会として、というよりも所属研究室での取り組みが必要
- 大会での使用言語を英語にしない限り、会員登録のページは外国語版があっても学術発表を理解できないことには変わりがないので特別な取り組みをする必要がないと思います。英語で発表する場（若手シンポジウム等）は日本人若手にも日本語を話せない外国人にもダイバーシティーの観点からいい交流場になると思うので作ってもいいのかもしれませんが。細かい点ですが留学生の中で日本語ができる人もいるので日本語を話せない外国人を「留学生」と呼ぶのはよくないと思います。"
- どれくらい日本語を話せない外国人の参加希望があるのか想像がつかず、取り組みの是非を判断しかねました。
- 若手セミナーでは、言語のサポートをしてくれる学生をつけてもらう希望を出せるようにするのはいかがでしょうか。過去5年で私が参加した会では、発表時間ではない方のセミナーの講師がもう片方の講師の発表内容を通訳してあげていました。日本人学生でも、完全な通訳まではできなくても、話題に参加できるようにサポートする対応ができるだろうと考えています。
- 方向として否定するものではありませんが、費用（労力）対効果がわからないため、上記回答にしました。
- 学会会期中にはコンシェルジュのような存在を受付に設けるといいかもしれない。それ以上の取り組みについては、学会員の満足度を高めることを優先するべきだと思います。例えば、上記の託児室の件など。
- 大会内での使用言語を共通語（英語）に限定可能であれば、積極的に促進する取り組みが必要です。その場合には、発表だけでなく質疑応答、評議員会、総会等々も含めて、全ての大会行事の英語化が求められます。中途半端な対策は、日本人参加者にとっても有益ではないと思います。それよりは、活発で高深度な議論が出来る学生や院生、あるいは若手研究者の育成が喫緊の課題と考えます。
- そもそも、発表や質問の言語を全て英語にすればよい。学生にとっても良い練習の場になると考えます。
- 国際化を目的にするのか、日本人研究者の底上げを目的にするかにより回答が変わると思います。私自身は英語での討論は日本人の若手研究者にとってはハードルが高く、結局深みが出ないと考えますが、将来的には必要となることは間違いないと思います。現状のように英語の会場・日本語の会場の両者が併存している状態でよいと思います。
- 思考言語が日本語の学会を目指しているならば、留学生には日本語の習得が前提の大会で良いと思います。ただ、その場合にもポスター、スライドは英語で作成するのが良いでしょう。
- 日本人が自分のデータについてきちんと英語で議論できるようになれば、参加した留学生も自然に「また来よう」、「他の友人にも声をかけてみよう」、となっていくのではないかと

思うので、まずは各自がそれを頑張るのが先ではないかと思う。(学会としてそれをサポートする取り組みがあっても良いかもしれないが、大会とは別の機会の方が良いかもしれない)

- 昨年初めて参加しましたが、口演に関し、基本英語という記載になっていたのですがほとんど日本語であり、もう少し明確にしたほうが日本語を母国語としない参加者には優しいかと思います。

4. ダイバーシティー推進の観点で、日本神経化学会への要望・提案はありますか

推進賛成

- 年に1回程度会員から要望や提案を募ることが必要と思われます。
- 推進するのならいろいろやるべき。慣例とか言う時代遅れの考えの人の意見を無視してでも一度取り組んでみてから修正していくべき。
- 神経化学会は学会規模が小さいので、他学会との共同開催を積極的に進めて、ダイバーシティーを出せるようにしてほしい。
- エクイティ、ノーマライゼーションの観点からも推進が必要だと強く思う。
- 特にありませんが、強いて言えば理事の中での女性枠・若手枠を考慮することでしょうか。
- こういったアンケートなどで意見を集め、とりわけマイノリティの意志や希望を尊重することが大切ではないかと考えます。
- ダイバーシティー推進委員会の活動をさらに進めて頂きたい。

女性の増加

- 座長の女性比率の定点観察。
- 若手、大学院生レベルで女性研究者を増やして行くことがどの学会でも重要だと思います。
- 女性研究者によるシンポジウム提案、座長などにも若手女性を積極的に登用。委員会は特定の女性研究者に集中して活動を阻害しないように配慮。ロールモデルとなる若手・中堅女性研究者に賞を授与するなど。様々な階層の取り組みでダイバーシティー推進を目指している学会として、女性会員増加を目指すといいと思います。

男女以外の観点でのダイバーシティー

- 高齢化が進みますので、お体のご不自由な方への対応も考えると良いかもしれません。
- 国家、人種、性別、年齢、言語、宗教、等々の壁を越えて、誰もが自由闊達に参加出来る環境を提供するのが本来の意義だと考えます。例えば、理事には女性以外にも外国人や年配者を登用することが、学会の本気度と姿勢を示す一戦略になります。委員会を設置してお題目を唱えるだけでは、他学会の取り組みとの差別化は不可能です。
- 中継(ネット配信など)による大会会場外(身体的理由等で会場に来られない方に対して)での参加方法の模索
- 男・女を謳うのでなく、男性20～85、女性20～85歳の会員各自が持つ異なった経験や考えを、神経化学を通して実現化するという観点を明確にして欲しい

活動には注意が必要

- ダイバーシティーは一般的には重要なことであるが、この学会は独自性があり、スコープを絞っているところがあるので、広げすぎるとエフォートがかかる割には、うまくいかないリスクがあると思うので、注意が必要だと思います
- 明確な目標がどこに設定されているのかがわかりにくいと感じています。
- 近年この分野においても過度な女性優遇が目立ち、真に公平な競争原理が無視されている。「表向きなだけのダイバーシティー推進」にはくれぐれも注意が必要である。

時間が限られている女性研究者が出来る交流・実態把握

- 女性研究者は人数が少ない上、家庭のことなどで(子供がいるから、早く帰らないといけな
い等)あまり飲み会に参加しない人も多いため、同じ世代の女性研究者に出会う機会が少な
い。また、PI になった人の体験談を聞く機会を設定する学会が多いが、一部の成功例の話
を聞いても、正直言って、あまり参考にならない(彼らが家庭の都合等で休んでも、とがめ
る人は誰もいない等、多くの女性研究者が置かれている環境とは全く異なる)。現実には、
PI ではなく、家庭と仕事の両立に悩みを抱えている女性研究者が多いと思うので(ポストド
ク～講師辺り?)、そういう人が出会い、話ができる場があるといいと思う。
- 研究者は研究室の移動も多く、特殊な職場環境・生活リズムのため、結婚すると、仕事と
家庭の両立に工夫が必要だと思われます。特に女性は多くのケースで、出産、子育ての負
担が男性より大きいのが現状だと思いますが、既婚の皆さんがどのようにワークライフバ
ランスに取り組んでいらっしゃるか、アンケートで実態把握できれば、今後結婚する人、
既に結婚されている人両方にとって、働き方を考えるための良い材料になるかと思ひます。
(既婚者の男女の仕事時間、配偶者の職種、家事時間、子供の有無、育児への親の援助の
有無、男女それぞれの既婚率など)

その他

- 仙台大会のスクールは参加して良かったという感想を聞きました。
- 特になし。会員の種類選択欄にその他を加えて貰いたい。正会員にチェックしたが、実際
は名誉会員。